

# 多文化共生の実現に向けて ～ 子供たちからの発信の工夫と教師研修 ～

前橋市立第六中学校 教諭（JLT） 生方 嘉彦

## 1 実践のねらい

日本語指導を受けている子供たちは、転入学時から、周りの子供や教師から、様々な支援を受けて学校生活をスタートさせる。次第に学校生活に慣れて、友人とのコミュニケーションも深めていくが、子供たちの様子を見ていると、自分の考えを自ら発信することが少なく、受け身になりがちな場面も多くみられる。このような中で、子供たちが自分のことを発信するためにどのような手立てがとれるかということ、多文化共生の視点から日ごろの指導の中で探っていきたい。

また、散在地区の前橋市においては、多文化共生の理念を実現するために、まず、教師自身が子供を理解することから始めていかなければならないのが現状である。子供たちが肯定される子供理解をめざす教師研修の実践についても、付記したい。

## 2 実践の概要

- (1) 子供自身からの発信の工夫
- (2) 前橋市における教員研修の場を活用した子供理解の推進

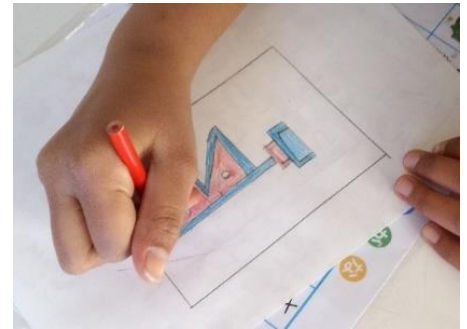


写真1 国旗づくり

## 3 実践の様子

### 【 子供自身からの発信の工夫 】

- (1) 子供たちの母国・日本に対する思い
  - (2) 発信の対象・場・伝達方法等
    - 転入時の自己紹介で発信する  
母語記入 プリント掲示 出身国 好きな食べ物 私の夢・・・
    - 教室掲示や校内掲示での発信する  
掲示場所の工夫 子供の興味・関心に基づいて（国旗 生活等）
    - プレゼンテーションによる発信  
子供主体の創意工夫  
自国の紹介（国の花、国の鳥、自然、学校生活 等）
    - 他校の外国人児童生徒（同じ母文化を持つ）との交流  
手紙（カード）を書く
  - (3) 担任への支援
    - 転入時の受け入れ支援  
学級活動 環境づくり
- ※ 母語に関わる資料提供 等



写真2 国際理解コーナーへの掲示

## 【 子供理解を深めるための教師研修 】

### (1) 前橋市教職員3年目研修

前橋市総合教育プラザより、3年目教職員研修で「日本語指導を要する児童生徒への関わり」について講義する機会をいただいた。講義を通して、一人一人の参加者に、外国人児童生徒への理解を深め、自分でできることは何かということを各自考えてもらいたいと考えた。対象者43名。9月30日実施。

#### 1 文化間移動する子どもたち

移動1 国(地域)間の移動

出身国 第2の国 第3の国

移動2 国内の移動

家庭 学校

#### 文化間移動と異文化適応

- 子どもは自分の都合でなく親の都合で移動を余儀なくされた  
→ 適応には時間がかかる
- 適応を現時点でとらえるのではなく、**発達の視点**からとらえる
- **学校や地域が多様性にどの程度寛容か**で、適応が左右される
- **学校・教師が積極的に支える**ことが適応につながる
- **親や家族の影響**が大きい → どう支えるか

二つの文化のはざままで、子どもは調整しながら、自分を育てていく → **TCK (Third Culture Kids)**

#### 2 学習言語と生活言語

おしゃべりはできるのに、勉強がわからない

<p>基本的対人伝達能力 <b>生活言語</b></p> <p>通常の生活場面で必要とされる力</p> <p>自然習得が可能</p> <p style="color: red;">1～2年で習得</p>	<p>認知言語学習能力 <b>学習言語</b></p> <p>抽象的、概念的なことを表し、高度に認知的な能力</p> <p>自然習得は不可能、組織的な学習が必要</p> <p style="color: red;">習得には5～7年が必要</p>
---	---

#### 3 子どもたちの進路

三つの保障

→

高校入試の壁の高さ

- 就学の保障** 不就学の問題
- 学習の保障** 教科学習につながる日本語力をつける  
どこでも日本語教育が受けられる体制づくり
- 進路の保障** 希望する全ての子ども的高校大学進学  
自分の未来を切り開ける力をつける

高校入学後のサポート

**受講者の感想より抜粋①** 勤務している学校に日本語ゼロベースの子供がいます。通常、海外旅行に行くレベルの文化の壁を毎日乗り越えていることを知り、自分の配慮が欠けていたことを自覚するとともに、その子が毎日元気に登校していることを尊敬しました。日本の文化を教えることも大切であるし、日本語に触れる機会をできるだけ多く確保することも大切ですが、その子のことを心から理解しながらコミュニケーションをとっていきたいと思いました。

**抜粋②** 他のみんなと授業に参加してほしいと思うあまり、その子の思いに寄り添えていなかったことを反省しました。外国籍の子供たちは、普段「わからないことが大半の中で過ごしている分、「わかった」「できた」という実感はうれしいものであり、成長につながるものであることを講義を通して考えました。日本語指導が必要な子供が今何を求めているのか考え、教師としてできることを増やしていきたいと思いました。グループワークを通して学んだ「絵カードをつくる」「ジェスチャーを教える」「掲示物を二言語で作る」などを生かせるようにしたいと思います。

### (2) 訪問校における教職員研修

- ① 管理職・学級担任の困りごとの相談から始める
- ② 受け入れを学校がするための各種資料・情報の提供をまとめてファイル化して提供する  
内容・・・ぐんぐんガイド、Q&A、母語資料(たのしい日本語 東京都教育委員会)、初期指導資料
- ③ JLT通信による啓発

## 4 実践のまとめ

### 【 子供たちからの発信の工夫 】

自国の文化への意識の強さは、それぞれが、これまで育ってきた環境や経緯によって、さまざまであり、一人一人の気持ちや学級の状況などを確認しながら、その子に合った発信の方法や内容を考える必要がある。

- ・ 転入直後に、紹介プリントに記入（母語で）して、教室掲示したことで、受け身になりがちな子供自身の自己開示を促し、受け入れをする級友の理解の深まりにつながった。
- ・ 校舎内の掲示コーナーの活用は、取り組みやすい活動である。国際理解に関する掲示コーナーなど既存の場の活用から始められる。今回は、旗の作成・掲示を行った。国旗は、子供たちが母国を意識するアイデンティティ形成にかかわるものであり、さまざまな展開例が考えられる。
- ・ 高学年児童の児童や中学生は、タブレットの活用が可能になるので、プレゼンテーションソフトを活用し、自国のことを紹介する活動ができる。いろいろなアイデアを出して、意欲的に取り組む姿がみられた。
- ・ 指導している訪問校の子供たちで同じ母国を持つ子供たちの間で手紙等のやり取りを始めている。今後、双方向の交流になることを期待している。

難しく考えずに、発信しやすいもの、本人がやりたいもので始めることが、無理のない活動につながる。活動に目的を持たせたことで、日ごろあまりモチベーションがあがらない子供が生き生きと活動する姿を見せた。子供たちの発信をよく認め、自信を育むことで、自己有用感を感じることもつなげたい。発信をきっかけに担任の先生にかかわっていただき、その後のクラス等での展開のたねまきとなるように進めることが重要と考える。

### 【 子供理解を深めるための教師研修 】

散在地区前橋の課題として、次の二点が考えられる。一点目は、受け入れの仕組みができていないこと、二点目は、受け入れに対する経験や情報が少ないことである。このような状況から、外国人児童生徒への指導を、従来からある日本語指導員に任せてしまい、自分事として考えられない状況が生じがちだった。課題解決のために必要なことは、外国人児童生徒の理解をより正しく深く理解してもらうこと、そして、それぞれの立場から、自分が子供たちの支援に対してできることを実践していこうとする意識を持っていただくことと考えた。講義では、子供たちが親の都合で来日し、異文化の中で、自分を調整し、育てていこうと努力していることを伝えた。どのような日本語指導が行われているか、把握していない先生たちに、内容を伝え、理解を深めてもらった。特に重点を置いたのは、自分の立場から何ができるかを実際に考えてもらうことでグループワークでの活動を設定した。

あらためて思うことは、現場の先生たちが、外国人児童生徒への指導が特別のものであるととらえており、自分の立場で何ができるかという発想を持てずにいることである。日本語指導の時間は週に数時間で、大半の時間は学級担任や教科担当が指導している。他人に任せずに自分事として「子供たちの指導は、学校全体で取り組むことが大事です。」と伝えてきたが、実際に、そう言われても、それだけでは学校は動けないだろうというのが現在の状況である。動き出すために、何が必要かの第一段階として教員研修を取り上げたが、今後より具体的な支援を打ち出すことが、さらに求められると考える。